

スポット 企画展 「芭蕉と須賀川おくのほそ道」 開催中です。



やたて 矢立

筆と墨壺を組み合わせた筆記用具。帯にはさんだりして携帯しました。



すいとう 水筒

軽くて丈夫なひょうたんを水とうにしました。

旅道具

できるだけ小さく、軽く、便利なものが理想であった。



わらじ 草鞋

傷みやすいため、何度もはきかえて使いました。1足およそ15文(248円)



けいたいようまくら 携帯用枕

木製の折りたたみ式。小さくためます。



芭蕉翁須賀川に宿るところの図 渡辺光徳筆

おくのほそ道

元禄2年 (1689)

46歳の芭蕉は弟子の曾良と

約2400キロをおよそ150日間かけて

歌枕をめぐりながら、東北や北陸の土地の人々や俳人達との出会いに期待を寄せ

俳諧をたのしみ、もてなしを受けながら

多くの名句をのこしました。

風流のはじめ館

2022 第11号 7月号

<https://s-furyu.jp/>



版画「おくのほそ道」最上川 小野塚虎男

名句鑑賞

四月二十九日(陽暦六月十六日)は快晴で、午前十時ごろに、芭蕉と曾良は馬で石河滝(現・乙字ヶ滝)に向かいます。途中、川が増水していたため、少し下流の渡し舟場「前田川の渡し」を舟で渡りました。馬は、近くの浅瀬を歩かせて、芭蕉らは向かい側の「田中の渡し」から守山へ向かったと思われれます。川の急流な様子や水の重量感が伝わってきますが、この場で詠んだ句ではないと言われています。

さみだれは滝降りうづむ水かさ哉 翁

『曾良随行日記』俳諧書留

石河の滝(乙字が滝)

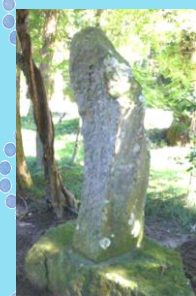


版画「おくのほそ道」石河の滝

瀧見不動堂の近くに

〈五月雨の瀧降りうづむ水かさ哉〉の句碑が建立されています。

建立年 文化十年(一八一三)



さみだれ

『五月雨』と書くので、五月に降る雨と思いがちですが、これは旧暦の五月の長雨のことなので、今の六月、梅雨の雨のことです。

五月雨を集めて早し最上川

山形県大石田の船問屋・高野一栄宅で勇壮な最上川の風景をよんだ句です。五月雨の水は、まるで一つに集まったかのような勢いと水かさを表しています。

句会の発句では「涼し」とよみますが、芭蕉は最上川の川下りを体験し、のち「早し」になおしました。



展示品の紹介



条幅 芭蕉翁三十六俳人之像撰併書画

内藤漸風書・翠圃画

個人蔵

はな紙の間にしをるるすみれかな

斯波園女



はな紙のあいだにはさんでもち帰ろうとしたすみれが気がつけば、しおれてしまっていました。

飛ぶ胡蝶まぎれて失せぬ白牡丹

杉山杉風

胡蝶が牡丹の花弁の一片に化身したかのようにまぎれて飛んでいます。



鮎の子の心すさまじ滝の音

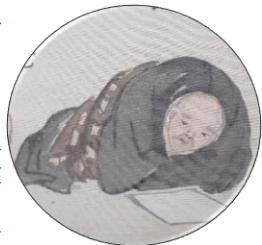
服部土芳

滝の音を聞きながら、その激流をのぼる鮎の子たちの心を思うと何ともすさまじい気持ちになります。

春雨やぬけでたままの夜着の穴

内藤丈草

春雨が降り続く日。ふと見れば、朝ぬいだ夜着が脱ぎっぱなしで、体が抜け出た穴があいています。



四季彩の庭

だより



乙字ヶ滝の見立て

月見台を囲む庭園には、崩石積と化粧砂利を組み合わせたことで水の流れを表現しています。

崩石積

石と石とが、かみ合って崩れそうで、崩れない工法

関守石

「ここから先の立入りはご遠慮ください」の目印として置かれています。



言の葉

文月

7月の異称。「七夕月」「涼月」ともいいます。文月や六日も常の夜には似ず

芭蕉

紫陽花

万葉集にも登場する花。鎌倉時代に鑑賞用として広まり、江戸時代には着もの柄や時絵などにえが

かれました。



青海波

海波をかたどった文様。末永く続く幸福と平安への願いが込められています。



お知らせ

こども俳句

出前教室

7月3回

児童クラブ

すかがわ

俳句ラボ

8/6(土)

2022

高校生

夏休み

こども

俳句教室

8/3(水)

8/4(木)

小学生

保護者

ゆかたを

着てみよう

8/20(土)

小中学生

保護者

俳句募集

募集期間 通年

選句会

年二回(八月・二月)

投句場所

市内二十一カ所

詳しくはHPをご覧ください。

俳句ポスト第1回

事前選句会 8/29(月)

本選句会 9/2(金)

皆さまからのご投句をお待ちしております。

選句会